

原武哲著 『夏目漱石の中国紀行』

<https://doi.org/10.15017/4377923>

出版情報：九大日文. 37, pp.95-98, 2021-03-31. Association of Japanese Literature, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

原武哲著

『夏目漱石の中国紀行』

満を持しての感ある一冊である。

著者には、漱石とその周辺の人物に関わる伝記研究として、すでに『夏目漱石と菅虎雄 布衣禪情を楽しむ心友』(教育出版社・シタ)、『喪章を着けた千円札の漱石 伝記と考証』(笠間書院)、『夏目漱石周辺人物事典』(同)、『夏目漱石外伝 菅虎雄先生生誕百五十年記念文集』(菅虎雄先生顕彰会)などがある。

これらの著書や事典の特色は、漱石のみならず周辺の人物についても平行的に伝記情報を精査し、その人間関係の網の目の中で漱石を捉え直した点にある。そのような伝記研究の方法は、従来の伝記事項の遺漏を補うのみならず、伝記研究にとつても新たな地平をもたらしている。

右に述べた著者による伝記研究の具体的な筆法を窺わせる事例を本書から引いてみよう。

英国留学の途中で上海に寄港した折の日記(明治三十三年九月十三日付)には、「税関ニ立花政樹氏ヲ訪フ 家屋宏大ニテ容易ニ分ラズ 困却セリ 東和洋行ヲ教ヘラレテ此ニ午餐入、立花至ル」とある。上海に着いた漱石が、大学の英文科の先輩である立花政樹を「税関」に訪問したことが知られる。立花についての情報があれば、この記事で漱石の行動は、それなりに納得

できそうであるが、本書の著者は、その上で「税関」の語に注目する。それが漱石と同行の芳賀矢一の日記では「江北海関」となっていることを確認した上で、「江北海関」は正しくは「江北海関」という清国の税務庁であること、漱石訪問時の建築物は、弘化二年設置の初代の「江北海関」ではなく、明治二十六年に建てられたイギリス教会式建築で、英国のビッグベンを連想させることから「大清鐘」と称されたこと、この二代目の「江北海関」は昭和三年に三代目の現在の上海税関が竣工されるまで使用されたことなどを記し、その写真も掲げる。それらの記述や写真によって、「家屋宏大ニテ容易ニ分ラズ 困却セリ」という漱石の体験が、二代目の「江北海関」と結びつく具体的な固有の体験として想像される記述になっている。

著者のこうした筆法は、日記に現れる人物や事物について尽くされている。たとえば先に引いた日記にある「東和洋行」についても、明治十九年に長崎出身の吉島徳三が、北蘇州路と河南北路の交叉する河南路橋(旧・鉄大橋)畔に設立した「日本人最上等旅館」であり、上海に日本人娼婦が多かったことから「上海新報」紙上で「醜業婦」宿泊の拒絶を広告していることなどを明らかにしている。ここでも写真による確認がなされており、先行する「実体はからゆきさんを抱えた娼館であつたと見ていいだろう」といった記述の誤りを正している。また、芥川や荷風の来訪時の記述も見届けることで、漱石日記に現れる「東和洋行」を歴史的な文脈の中で再現する筆法になっている。

著者の一連の伝記研究の特色は、しばしば実証的の語で評さ

れるが、実証的という以上に、対象に対しての愛情にこそ特色を見るべきではあるまいか。その愛情が、対象となる人物の言行や見聞や人間関係について、なるべく忠実に具体的に再現してみたいという実証として現れたのが著者の仕事であり、その姿勢の徹底が、本書においては際だつている。

愛情について付言する。著者は「満韓ところど」の実地調査の折の縁があるとはいえ、吉林省德惠市の郊外にある朱家小学校に校舎を増築し、電気を配線し、運動場を拡張、原武哲希望小学校として教育設備など十年以上も支援を続けた。菅虎雄の故郷（福岡県久留米市・梅林寺）に顕彰会を作り、会員を募り、寄付を募り、漱石の句碑と菅虎雄の顕彰碑を建てた。いずれも、なまなかな愛着でできることではない。顕彰会を起したとき、著者はすでに八十歳に手が届く年齢だったことを思えば、思い半ばに過ぎるものがある。

最初に「満を持して」と述べたのも、漱石の二度にわたる中国体験（中国紀行）の実際が、著者一流のきわめて具体的な人物探求や実地調査に基づき再現されているからというより、そのような調査や探索を通じて、著者が中国での漱石の見聞に注ぐ愛情がほとばしる感じがあったからにはかならない。漱石の見聞のままの中国の再現、その熱意は、著者自身の中国と中国に暮らす人々への愛情と不可分である。その点で、本書が「漱石と中国と私」と題された「序章」から始まるのは、きわめて本書に似つかわしい。

本書の概要を伝えるには、なまじつかな要約より、細目まで

付された目次を紹介するに若くはない。以下の通りである。

序章 漱石と中国と私と

漱石と中国／中国と私／漱石と漢詩・漢文／漢学から英学へ／漱石と南画

第一部 留学途中に見た上海・香港

第一章 漱石が見た上海

漱石の英国留学／プロイセン号／上海へ／東大英文唯一の先輩 立花政樹／江河北関／東和洋行／朝日館（旭館）／パブリック・ガーデン——犬と中国人入るべからず／日本人の場合／上海一の繁華街 南京路／四馬路／乗り物——轎・一輪車・人力車・馬車・自転車／電車・自動車もたらす人力車夫の悲惨な生活／張園／愚園／街路の異臭と租界／上海出航／福州

第二章 漱石が見た香港

九龍／香港島／クイーンズ・ロード／ヴィクトリア・ピーク

第三章 上海・香港で見た中国と中国人

漢籍の中の中国と生身の中国人／高杉晋作の先見性／上海の租界と工部局／虹口に集まる日本人／日英同盟と貧乏人・富豪の婚約／日本人より遥かに名誉ある中国人

第二部 満韓旅行

第一章 漱石と中村是公

一 大連

「満韓ところぐ」の旅行／漱石招聘／新橋出発／鉄嶺丸船中／大連港到着／青泥窪・ダルニー・大連／満鉄総裁社宅／大連ヤマトホテル／満洲館／日本橋／大連倶楽部／電気遊園／中央試験所／鳥の鳴き競べ／立花政樹再会／満鉄本社／俣野義郎——「吾輩は猫である」の騎人・多々良三平／舞踏会——是公の演説／扇芳亭／橋本左五郎——「何ぞ憂へん席序下算の便」／大連医院／近江町の満鉄社宅／北公園／川崎造船所／大連発電所／関東総督府・関東都督府民政部と大連民政所・旅順民政所／従事員養成所／化物屋敷／油房／苦力／俣野公館／村井啓太郎／日本文学で最初に描かれた麻雀／苦力の親分 相生由太郎／清岡卓行の描く寺児溝／相生さん

二 旅順

警視総長 佐藤友熊／旅順へ／旅順停車場／旅順ヤマトホテル／旅順戦利品陳列館／繻子で薄鼠色の女物靴／東鶏冠山砲台／夏日漱石歓迎会——関東都督府民政部主催／二百三高地（爾靈山）／旅順港／旅順口閉塞作戦とその失敗／田中清次郎とすき焼き／民政長官官邸／佐藤友熊宅訪問／大連を去る

三 熊武城

トロッコで熊武城温泉へ／苗圃／松山・黄旗山／馬賊と匪賊／望兎山・望小山／熊武城出発 営口に向かう

第二章 奉天へ

一 営口

営口と牛莊／清林館／遼河の汚泥、渤海湾を埋め尽くす／舢板／日清豆粕製造株式会社営口出張所／営口の回教礼拝堂／営口の劇場／営口の女郎屋——泥濘の中の妖花／二葉亭、ロシア人に騙される／営口での講演——趣味に就て／博士になったり、ならなかったりの橋本左五郎

二 湯崗子

湯崗子へ／千山行断念／海老茶袴の女

三 奉天

奉天に向かう／奉天城／馬車と洋車／奉天の筆屋／瀋陽館／満鉄奉天公所／北陵へ 軋たる車にて／北陵／奉天城宮殿／馬車に轆かれた老人／奉天の茶園

四 撫順

撫順炭坑／坑内見学

第三章 「満韓ところぐ」中断以後

一 哈爾濱

撫順から哈爾濱へ／満鉄線最北端長春停車場——東清鉄道への乗り換え／国際都市「東方のモスクワ」哈爾濱／藤井十四三／東洋館／夏秋亀一／誕生年製造の外套／埠頭公園／日本人石工も作った松花江鉄橋／傅家甸——中国人街／新市街——南崗／旧哈爾濱——香坊／露助について／ロシア人留学生エリセーエフ

二 長春

長春到着——三義旅館／長春の湯屋／長春座／馬賊・邊

見勇彦の事業——賭博場・華実医院／長春のインフラ／再び、奉天へ

三 安東

悪名高い「不安奉線」／安奉線中間点——草河口／安東
県到着——元宝館／安東県／東益増速で絹袖を買う／関
帝廟と天后宮／韓国北端 新義州

第三部 漱石の中の中国・韓国

文学としての「満韓とこころぐ」と満鉄向けの「満韓の文明」／
日清・日露戦争の勝利が日本人にもたらしたもの／水の豊かな
な日本と水の不足する中国東北／帝国主義・植民地主義／漱
石と伊藤博文／日露戦争前後の日韓関係／漱石の自家撞着こ
そ真面目・良心・正直

補注／写真説明／あとがき／人名索引

本書の筆法については、すでに「税関」と「東和洋行」で一
端を示したが、第一部と第二部では、右に掲げた目次の細目に
ついて同じような水準での追跡がなされている。

第一部から建物について引いたので、第二部から人物の事例
を引いてみよう。第二部第三章に「馬賊・邊見勇彦の事業——
賭博場・華実医院」という細目がある。「馬賊」とあるように、
『邊見勇彦馬賊奮闘史』（先進社、昭和六年）の自伝もある「馬賊」
だった人物である。父親は、西南戦争の薩軍の猛将として知ら
れ戦死した邊見十郎太である。著者は、明治四十二年九月二十
四日付けの「漱石日記」で、漱石が藤井十四三に伴われ長春の

賭博場を訪れており、それが「彼岸過迄」（明治四十五年）の一
節「中でも最も敬太郎を驚かしたのは、長春とかにある博打場
の光景で、是は嘗て馬賊の大將をしたといふ去る日本人の経営
に係るものだが」云々と続く一段の背景になっていることを指
摘した上で、作中の「馬賊の大將」が、「邊見（逸見）十郎太
の遺児邊見勇彦（江侖波）」であるとして、渡辺龍策『馬賊頭
目列伝』（秀英書房）、『関東都督府統計書第五』、竹中憲一『大
連歴史散歩』（暗星社）なども踏まえながら紹介している。もち
ろん、藤井十四三についても、満鉄『社員録』をはじめ人事録
や興信録、沼波瓊音『鮮満風物記』、伊原幸之助『長春発展史』
などに拠りつつ、その履歴や人柄までも記され、長春での漱石
の行動に果たした役割が髣髴とするような筆法になっている。

第三部は、漱石と中国という問題について、「吾輩は猫であ
る」、「彼岸過迄」、「門」、「明暗」なども引きつつ、細目にある
トピックを中心に述べたものである。その大尾は、「漱石は書
きながら「満韓とこころぐ」に嫌気が生じ、自家撞着に陥って、
中途半端な中断に到ったのは、むしろ人間としての真面目、良
心、正直ではなからうか。」という一文である。

生きられた体験は、一回的で永遠に消えてしまいうしかないが、
本書は、漱石によって生きられた「中国」をそのままの再現は
不可能としても、種々の具体的事物や人間との具体的な関係を
通して幻視させる。

（二〇二〇年一〇月 鳥影社 四一四頁 二八〇〇円＋税）